

4 子どもと共に振り返る「記録」

記録は子どもにとっても興味を引く情報になります。カレンダーや写真などの掲示物、ポートフォリオのような手にする物など、年齢や発達に応じた「記録」が環境にあることで、子どもたちはその情報を取り入れて、遊びや生活を豊かにしています。

子どもが書いたものや保育者が書き留めた“もの”は、作品や教材として保育に活かす環境になり、生活や体験を共に振り返り共有できる貴重な「記録」です。

子どもの言葉の記録 「あおむしの気持ち」 墨田区立立花幼稚園（東京都）

日頃から利用している保育者手作りの活動カレンダーを活かして、アゲハの幼虫を飼い始めた子どもたちと成長や羽化の日を楽しみにしながら、「アゲハカレンダー」を作った。カレンダーにより興味が深まった子どもたちの観察の援助になるように、保育者は子どもの声に応じて幼虫の成長を写真に撮り、幼虫や蝶がしゃべっているように言葉を吹き出しにして掲示することにした。①

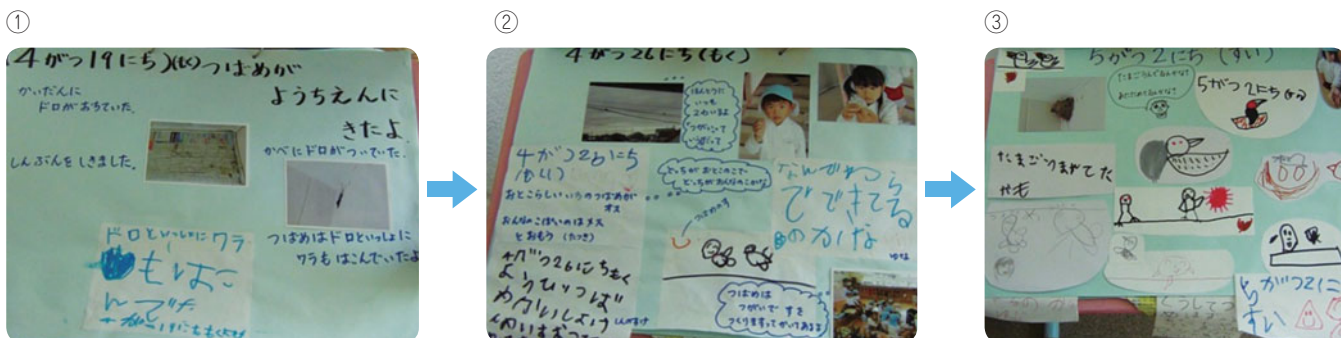
これらの写真や掲示により、子どもたちは幼虫を見守る中で感じたことや考えたことを言葉にする場面が増え、保育者は言葉を意識して「もっとたくさん言葉にして欲しい」と願いをもつようになった。そして、更に写真を大きく引き伸ばして掲示をし、子どもが自由に吹き出しに「あおむしの気持ち」を書き貼れる環境を作った。すると、すぐに子どもたちの言葉で埋まっていた。②

当初は何を書けばよいか分からない様子の子どもも、次第に思いが書けるようになり、友達同士で会話をしながら書いたり掲示を見て会話を楽しんだりするようになった。③



見たこと、感じたこと、気付いたことを記録 「ツバメ日記」 富田林市立錦郡幼稚園（大阪府）

園内で巣作りを始めたツバメの様子は園全体の関心事になり、「ツバメ日記」がスタートした。当初は、「つばめがようちえんにきたよ」など、その日の顕著な様子を保育者が書いていた①が、次第に子どもたちが絵やコメントを書くようになり②、10日後には、子どもたちの記録による日記になっていた③。不思議に思ったり気付いたりしたことを表す毎日の積み重ねにより、観察も表現も細やかになった。また、日記により、振り返ってツバメの様子を話すようになった。



ツバメが誕生し巣立っていった感動体験は、その後のツバメの巣をまねて作る製作活動（P.29 参照）やペーパーサート・紙芝居・OHP などで「ツバメの創作話」の表現に結び付いた。日記には表せなかった気付きや情報を、友達と工夫して表現する活動に発展した。